3.11 伝承ロード

記憶を残す 明日のために

語り部バス 学びの場に

「南三陸ホテル観洋」おかみの阿部さん

宮城県南三陸町にあり、雄大な志津川湾を望む「南三陸ホテル観洋」。創業者のチリ地震津波の被災経験を基に、高台の固い岩盤の上にある。震災後は避難者やボランティアら最大1000人ほどを受け入れ、避難所の機能を果たした。2011年夏には、町の沿岸部を巡りながら被災体験を伝える「語り部バス」の運行を開始。これまでの利用者は延べ42万人以上を数える。

ホテルが保存する民間震災遺構「高野会館」を見学する語り部バスの乗客

津波で町の姿は一変。当時、公の避難所ではなかったものの、ホテルは建物の損壊がほとんどなく、多くの住民の避難を受け入れた。おかみの阿部憲子さん(59)は自身も被災者ながら「皆さんを守らなくては、支えなくては、の一心だった」と振り返る。

「ホテルが稼働することで精肉店、鮮魚店、生花店、さまざまな商店に結び付く。震災以降、人口が一気に減少する中、交流人口の担い手である宿泊産業の私たちが頑張ろうと奮い立った」

鉄骨だけが残った旧防災対策庁舎など、南三陸町の生々しい津波の傷跡は大きく報道され、直後から訪れる人は多かった。団体宿泊客の要望で、スタッフが「道案内」としてバスに乗り込み、震災前の様子を語っていた。より多くの人に伝えることが重要だと、宿泊客向けに「語り部バス」の活動を始めた。乗客がたとえ1人でも運行する。

震災からしばらくの間、被災地は観光や旅行のキーワード「わくわく感」「楽しみ」が失われてしまった。その代わり、被災地での出来事を見聞きしてもらうことが、新しいキーワード「学び」につながった。

ここで生きていく

津波が押し寄せた跡を見た参加者は一様に声を失う。阿部さんは修学旅行で来た子どもたちに講演する機会があった。子どもたちは旅行後、進んでリーダーシップを取ったり、不登校だったのが学校に行くようになったりと、行動に変化があったという。

「甚大な被害を見て、それでもなお地域の人が前に進む様子に心を動かされたのかもしれない」とほほ笑む。

「震災時はお客さまの中に関東の方もいた。人は移動する。いつ、どこで自分が被災するのか分からない。住んでいる場所だけの問題ではない」。小さい頃から家庭や地域で防災教育に取り組む必要性を説く。

震災から11年。町内の道路は整備され、震災遺構の解体が進む。さら地で説明しても伝わらないもどかしさを感じるようになった。自社で二つの民間震災遺構を所有する一方、「震災遺構という〝ものいわぬ語り部〟は重要だが、全てを残せるわけではない。それぞれの立場でどう行動していくのか考える時期が来た」と話す。

「私たちはご先祖さまから、バトンをつないでここまで生きている」と力を込める。南三陸町で話を聞いた人たちが第2の語り部となり、震災伝承を、バトンを次世代につないでいくことを願い、きょうも伝承活動にまい進する。

ホテルが避難所として機能していた頃の住民の様子を捉えた写真を紹介する阿部さん